



# 近江の古瓦 XIII 補遺1

—(湖西・湖北)—

湖西・湖北で出土した古瓦については昭和52年12月に「近江の古瓦II」でその概要を述べましたが、その後10年の間に多くの新しい発見がありました。これらの古瓦についてその概要を述べることにします。

高島郡の高島町鴨で軒丸瓦が一個採集されていました。耕作中に発見されたもののようで、遺構などは不明です。複弁8葉で、外区には粗い間隔で珠文がめぐっています。奈良時代のものでしょう(1)。同じく高島町横山の唐木谷で軒丸瓦が1個発見されましたが、これは発見の場所から見て瓦窯ではないかと推測されます。しかしその詳細は不明です。単弁12葉で、蓮子は1+8、素文縁をめぐらしています(2)。これと同似で弁数10のものが新旭町安井川の大宝寺跡や今津町大供で出土しており、これらとの関連を考える必要があるようです。新旭町霜降の国道161号線バイパス工事に先立つ調査で、1個の軒丸瓦が発見されました。素弁10葉のもので、中房部分は特に作らず、1+7の蓮子を置いているだけです(3)。これについては、その時代を奈良時代と見る意見と、それよりも古く見る意見があるようです。文献によりますと、続日本紀に藤原仲麻呂の乱に関連して藁園寺という名が出ますが、この出土位置が藁園に近いので、あるいはその関係のものかとも思われます。同町岡では、素弁8葉と思われる軒丸瓦が1個採集されていますが、寺院跡なのか瓦窯跡なのかは不明です。これと同似のものは今津町大供で発見されています(4)。

以上の4ヶ所はすべて1個だけの採集ですが、今津町大供では多くの瓦が発見され、近

くにはその瓦を焼いた瓦窯跡と思われるものもありました。残念なことに寺院遺構が発見されていないので、これがどのような規模の寺院であったのかわかりません。瓦は大きく分けて、軒丸瓦が4種類あるのに対し、軒平瓦は重弧文のものばかりです。その軒丸瓦で最も古いと思われるのは素弁8葉のものですが、蓮子は1+8で、弁の中央には稜線があり、外縁は素文縁です。これと類似のものは県内の数ヶ所で見られます。白鳳時代のものでしょう(5)。他の3種類はあまり例のないものばかりで、時代も上述の素弁のものに比し、やや新しくなると思われます。中でも非常に特殊な文様のものは単弁6葉のものですが、蓮子は1+6で、その外縁には輻線文が変化したとも、鋸歯文が変化したとも考えられる斜線が4ヶ所で方向を変えて施されており、その方向を変えるところが三角形になるというものです(6)。単弁10葉のものは、蓮子が1+8で、縁は素文縁のものばかりのようです(7)。ただし、新旭町の大宝寺跡でも同種のもので出土していますが、これにはX字状文を外縁に施したものもあります。なお、前述の高島町横山のものとは弁数は異なりますが文様の形式は同系のもので、さらにもう一つ素弁8葉のものがありますが、これは出土数も少なくその性格ははっきりしません。蓮子は方形に4個が並び、間弁は細長い三角形で、他に例を見ないものといえます(8)。軒平瓦は殆んど三重弧文である中に(9)、二重弧のものが1個発見されています(10)。この重弧文も重弧の作り方で分類できるようですが、その違いが軒丸瓦の違いに応じたもの

のかは確言できません。

同町日置前の伊井と三谷の間の林の中にも寺院跡がありますが、ここで最近軒丸瓦の破片が発見されました。このほか、安曇川町上古賀で平安時代と思われる平瓦が数点発見されております。

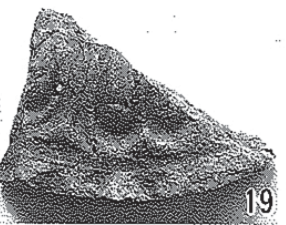
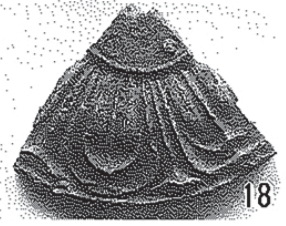
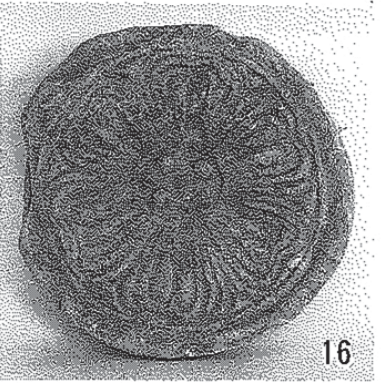
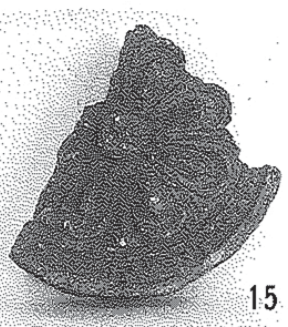
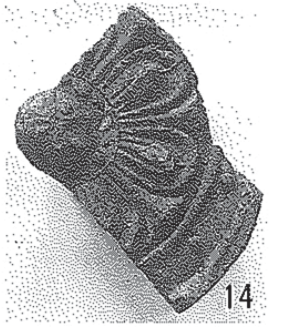
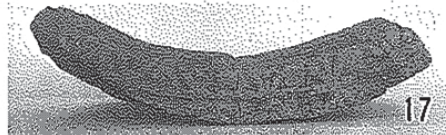
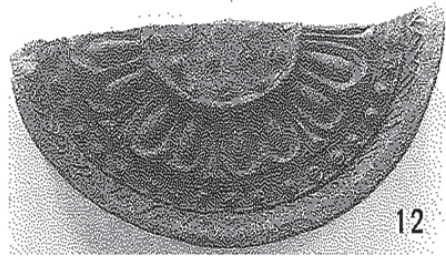
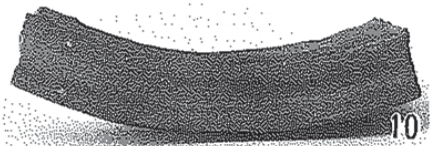
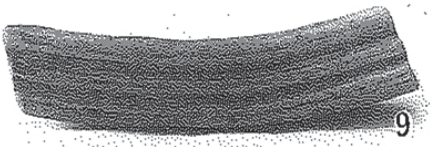
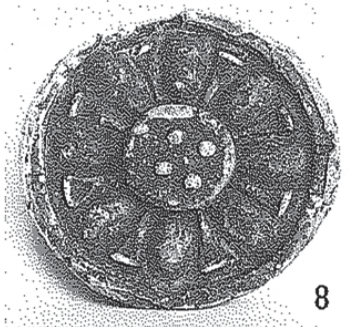
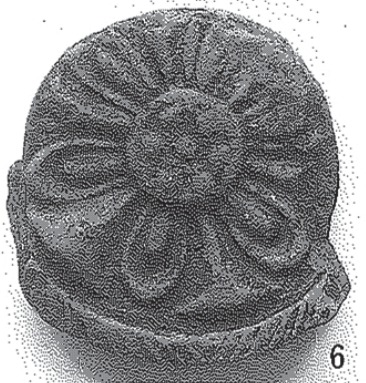
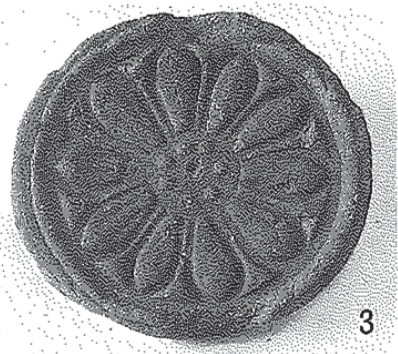
伊香郡では高月町井口を中心としたあたりに瓦の出土地があります。これは「文化財教室シリーズ18」で井口及び保延寺出土瓦として一部紹介しましたが、その後さらに多くのものが発見されました。前稿の後に発見されたものについて、その主なものを紹介しておきましょう。なお、瓦の出土地は井口と保延寺等にまたがりますが、一応同一寺院と見てよいでしょう。軒丸瓦では複弁8葉のものが3種類、近江特有の単弁系のものが2種類、それに特殊な複弁6葉のものが1種類あります。複弁8葉の一は中房が大きく弁もしっかりしたものです。しかし半截の破片で縁部が欠落していますのでその詳細を知ることができません。蓮子は1+8+8でしょう(11)。他の二つは共に外区に比較的密な珠文帯をめぐらしています。一はこれも半截の破片ですが、蓮子は1+6+12と思われ、外縁は特殊な鋸歯文とでもいべきものです(12)。他は外縁部が細い素文縁で、蓮子は1+6+12です(13)。近江式と称される中房をめぐって珠文帯のある単弁8葉のものは、外区の珠文の間隔があらくて数の少ないものと(14)、密に数多く並んでいるものがあり(15)、あらい方は前シリーズでも紹介しました。どちらも中房が4分割されています。特殊な複弁6葉の軒丸瓦は、中房が圈線で区画され、蓮子は1+4と少なく、弁は三重の線で表現され、子葉の間に界線がありません(16)。次に軒平瓦ですが、重弧文のものについては前稿で紹介しておりますが、平瓦の端部に\*文をスタンプしたものが新たに発見されました(17)。

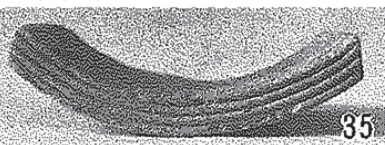
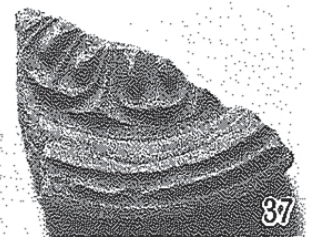
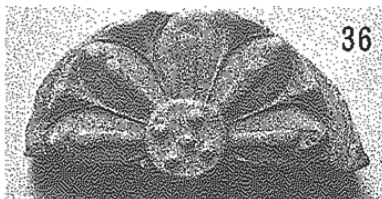
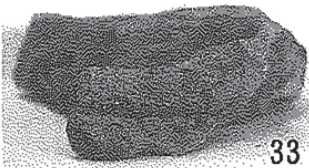
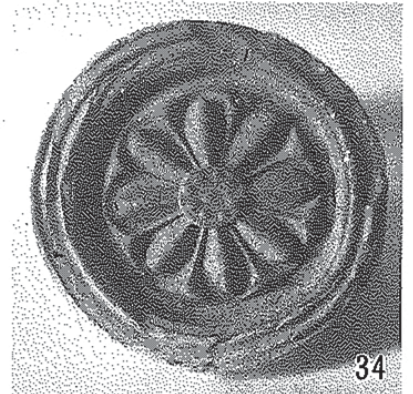
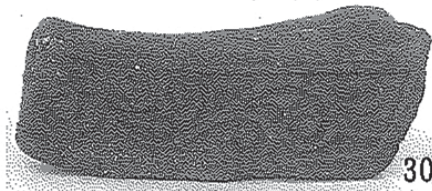
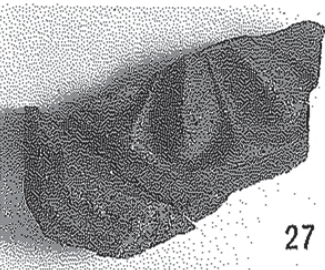
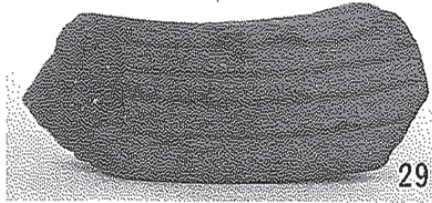
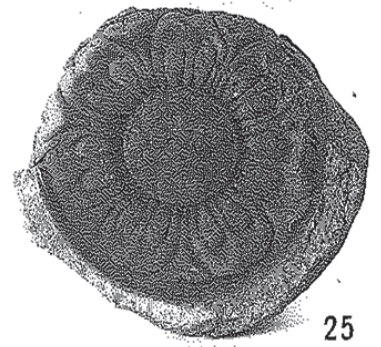
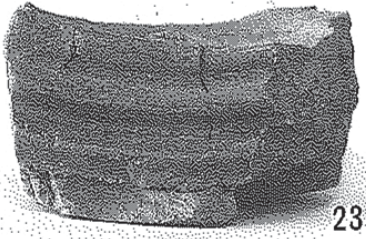
伊香郡ではこのほかに西浅井町諸川と高月町高野で瓦窯が発見されています。ともに軒

先瓦はありません。諸川の窯はどこかの寺院の瓦を焼いたのか不明ですが、高野のものは井口あたりのものを焼いたと思われれます。

東浅井郡では、湖北町の余呉川の川口近くで新しく古瓦が発見されました。前稿の時には津里出土瓦が1個と尾上出土瓦が1個採集品として知られていましたが、最近このあたりの土木工事に伴って多くの瓦が発見されました。津里では極先瓦と思われるものが発見されました。一つは中房の中央に釘穴があり、裏面が平坦で、極の先に打ち着けた極先瓦とわかるものです。文様は複弁のようですが、普通の複弁とは異なり極めて特殊なものと言えます(18)。もう一つは中房部分が殆んど欠けていますので、極先に打ち着ける釘穴があるかどうかはわかりませんが、裏面の状態から矢張り極先と見るのが適当なものです。文様は複弁です(19)。

津里の南方余呉川を越えた今西の比伎多理神社境内には礎石らしいものがあり、比処で出土した軒丸瓦の拓本が「東浅井郡志」に掲載されています。この神社に南接する地は延勝寺に属する「浅井寺」という小字名であるところから、この付近が浅井寺跡と考えられていました。ところが、この神社付近で湖北町が工事をした際まとまって瓦が出土しました。軒丸瓦の一は複弁8葉線鋸歯文のもので、蓮子は1+5+10です(20)。これは前述の郡志に記載されている拓本と同じ種類と見られます。また、尾上で採集され前稿で紹介した単弁8葉で中房をめぐって珠文帯のあるものが此処でも出土しました(21)。これは近江式とよばれるもので、高月町井口出土のものと同似のものです。さらにもう一つ注目すべき軒丸瓦が出土しています。これは外区に飛雲のある単弁16葉のものです。飛雲は左行で雲尾は内側になびいています(22)。飛雲文は大津市南滋賀や国分・瀬田にだけ見られるものでしたが、此処で飛雲文軒丸瓦が出土したことは注目すべきことです。湖南の飛雲文とこ





の浅井寺遺跡出土の飛雲文がどのような関係にあるのか、その解決は今後の課題でしょう。ただし、この飛雲文は湖南のものにくらべると文様がやや硬化しており、その時代は新しくなるのかもしれませんが。軒平瓦は四重弧文のものが1種発見されました。その弧の断面は三角形に近く、重弧文としては珍しいものです(23)。このように断面が三角形に近い重弧文は、草津市南笠の妙楽寺所蔵品にあり、これまた飛雲文とともに注目すべきことです。

比伎多理神社から少し西方に離れた、小字名で天寺(尼寺)と称されるあたりからも前述の複弁8葉のものと同様の軒丸瓦が出土しました(24)。また湖岸の尾上で、津里で以前に採集されていた複弁7葉のものと同じ軒丸瓦が発見されました。外縁は殆んど剥落していてよくわかりません。中房には1+4+9の蓮子があります(25)。

長浜市では新庄馬場の八坂神社周辺で数種の軒先瓦を含む多くの瓦が発見されました。この神社の境内には早くから注目された礎石があり、瓦の出土も伝えられていましたが詳細は不明でした。ところが、今回圃場整備事業にともなって幾種かのものが発見されました。その一つは複弁8葉のもので、中房が大きく、蓮子は1+5+11と思われます。外縁は欠落していてその文様は不明です(26)。さらに以前から此処で出土したといわれていました山田寺式の単弁8葉重圏文縁のものが出土しました(27)。近江の山田寺式の瓦は、大津市の衣川廃寺と湖東地方の北半から湖北で見られる形式の瓦です。そのほかあまり例を見ない軒丸瓦があります。これの時代は前二者にくらべると新しいと思われます(28)。軒平瓦では五重弧文のものが出ています(29)。また、平安時代のものかと思われる唐草文の軒平瓦も発見されました。中央から左の部分欠落していますので正確には言えませんが、おそらく均正唐草文のものでしょう(30)。

最近長浜市東上坂の柿田遺跡で非常に珍し

い軒丸瓦が発見されました。鬼面文と言われている軒丸瓦です。これは奈良県の大坂府よりある新庄町の慈光寺出土瓦として有名であったものと同系統の瓦で、新羅系のものと考えられています。鬼の牙などが慈光寺のものよりはやや力が無くなっていますが、全国的にとっても珍しいものです。なお、外縁には重圏文がめぐっています(31)。

坂田郡では、山田寺式の単弁8葉重圏文縁の軒丸瓦のほぼ完形品が近江町飯の正恩寺遺跡で出土しました(32)。また、軒先部分が僅かしか残っていないものですが、三重弧文の軒平瓦も出土しています(33)。世継でも丸瓦片が発見されており、この飯の集落の西方に山田寺式瓦の寺院があったものと思われる。

同じ坂田郡の米原町枝折の三大寺跡は山田寺式の瓦と藤原宮式の瓦を出す遺跡として知られています。これについては前稿で瓦の紹介をしておきましたが、付近の圃場整備事業などでさらに多くの瓦が発見され、その遺跡の性格も明らかになってきました。この遺跡からは前述の如く山田寺式のものと同様のものが出土していますが、この両者を出す遺跡ははっきりと区別されているようです。山田寺式のものとは枝折川の南の塚原古墳群に近い所の遺跡から出土し、藤原宮式のものとは現在の醒井小学校に近いあたりから出土しているようです。今回調査された遺跡は枝折川の南にあり、山田寺式関係のものだけが大量に出土しました。その軒丸瓦は既に前稿で紹介したものと同一ですが、今回はほぼ完形のものが出土しておりますので、改めて紹介しておきます(34)。なお、これに伴うべき重弧文の軒平瓦は、これまでにはっきりした遺物はありませんでしたが、今回の調査で四重弧文の瓦が出土しましたので、その代表的なものを示しました(35)。そのほか、同じく単弁8葉のものですが、蓮子が1+4と少ないものも出土しています(36)。また、内区の文様が複弁8葉で、重圏文をめぐらしたものも少

量ですが出土しました(37)。

同町磯の磯廃寺については、前稿でその概要を述べましたが、その際紹介した鷗尾破片がある程度復元されましたのでその写真を示すこととします。その時一緒に出土した小破片のものに、コンパスで円文が画かれていたのでこれも示しました。

山東町本郷でも圃場整備事業に伴って古瓦が発見されましたが、これらについては写真のページの紙幅の関係で次の湖東のものを紹介する際に紹介することとします。

(西田 弘氏提供)



磯出土鷗尾破片  
(コンパスによる円文がある)



磯出土鷗尾復原

瓦出土地位置図



1. 鴨(1) 2. 横山唐木谷(2) 3. 上古賀 4. 藁園寺(3) 5. 岡(4) 6. 大供(5~10)  
 7. 日置前 8. 諸川 9. 井口(11~17) 10. 高野 11. 津里(18, 19) 12. 尾上(25)  
 13. 浅井寺(20~23) 尼寺(24) 14. 新庄(26~30) 15. 上坂(31) 16. 飯(32, 33)  
 17. 世継 18. 枝折(34~37) 19. 本郷 20. 磯 (括弧内は写真番号)